

山田親広

やまだ

ちかひろ

この1年、美術監督の山田親広さんは、11人の造形作家たちと共に展覧会に向けて話し合いを重ね、ディレクションを行いつつ、自らは複数のクロッチの立体作品を完成させた。

さまざまな新素材に挑戦し、試行錯誤を重ねて完成させた立体像の数々。山田さんには、造形作家として自らの作品について、美術監督としては展覧会全体の見どころを語ってもらった。

本当は、作品に手で触れてほしい

「触れられなければ立体である意味がない。僕の考えです」。きっぱりと言いきる山田さん。「指先で触れてみることで作品を身近なものにしてほしい」という。山田さんは、クリヤレジン、金箔、黒御影石、銅で、5点の立体像を制作した。見どころは「さまざまな素材を使用したこと」と「特別な視点で選んだ素材が醸し出す、おもしろさと思議さ」だと語る。

うだ。最初はFRPの型で試したが、カラーサンドが固くて柔軟性がないので型からははずせず、最終的にはシリコンで型取りをした。

今回、立体像すべての台座も山田さん自ら制作した。それぞれの作品の形を考えて台座の形をデザインしたという。台座表面のテクスチャーには味がある。「意図的でない形を脳はきれいだ」と認識する。波、雲など、自然に近い形状を美しいと感じるのかな。そんなことを考えながらヘラを動かしていたそうだ。

作品造りにかけた1年間を振り返って

「のら猫クロッチというキャラクターと向き合い、自由に作品を制作すること、スタッフたちは最初とまどった。「キャラクターで自社製品のアピールをし、おのおのの作風に合うものを作る」というこの企画に、最終的には26名の制作スタッフのうち、約半数がアイデアを出してきた。全員が通常業務とのスケジュール調整に苦心しながら、「クロッチ作品」の制作時間を確保したそうだ。2〜3週間にわたるスタッフの集中した時



「物づくりとは、人を喜ばせるための演出のひとつで、人を喜ばせることを主体に考えると、創造力は湧いてきます」と山田さん。写真左は、作品「のらでよかった」(クリヤレジン)、右上は作品「先駆け、クロッチ」(金箔仕上げ)、右下は作品「ZEN」(黒御影石仕上げ)

「銅」の重厚感がイメージ的にヒットしたのは「力んでいるオイラ」だ。
抗酸化処理が施された、ドイツ製の新素材の銅粉と樹脂を使用した。「銅の作品」に取り組んだ夏場は硬化速度が早くなり、すぐに固まってしまうので、作業ができる時間はとても短い。塗る時間がないのだ。硬化速度を下げるために硬化剤の量を減らすと、今度は完全に硬化しない。厳密な温度管理のもと、「時間との戦い」をくりぬけて、作品を完成させた。

困難きわまりなかった

一番苦労したのは、水のように透きとおった作品。素材にはクリヤレジンを使用したのが、完全に透明にするために、空気の泡を抜かなければならず、しかも、シリコンの型作りの際には硬化速度のコントロールが難しかった。透明の「もの」を抜くためには、シリコン型もまた透

展覧会の見どころは

間を確保するのが一苦労だった。「それでも1年間という時間をかけたのがありがたかった」と山田さんは振り返る。

技術開発には毎日のように取り組んでいるスタッフたちだが、今回「クロッチ」を自由に制作したことは、表現やアイデア出しの訓練になり、自分たちでオリジナル商品を作り上げることにへのいいシミュレーションになったそうだ。

『創造する』ということ、わたしたちから発信していかねければもったいない。みんな、好きでこの仕事をしているのだから。こう語る山田さんに、今回の展覧会全体の見どころを尋ねた。

「ラッキーワイドの造形屋としてのアイデアと作品の素材感をぜひ見て欲しいです」。

●山田親広(やまだちかひろ)
造形作家。株式会社ラッキーワイドの管理職、技術主任として30名以上の若手造形作家たちをまとめている。